全年十一月の第十八回市民文化祭には、コミュニテ　・センタ
ー大ホールホワイエに七点を展示した。

（番号）	（題　名）	（出品者）
1	建長板石塔婆	丸田　富夫
2	越谷を中心に分布する山王二十一仏板碑	星野　昌治
3	伝承民俗行事・北川崎坂巻家の御歩射	石塚　吉男
4	高札	中村　忠夫
5	蒲生の石宮	日置　宗一
6	大聖寺の庚申塔	加藤　幸一
7	迅速図でみる越谷	宮川　進
	写真6	坂巻　高次
	6を除いてすべて	山田　政信

〈建長板碑〉

丸田冨夫

板碑は死者の菩提を営むため、あるいは造立者自身が生前に、死後の冥福を祈るために建てられたものである。

関東地方では「秩父青石」とよばれる緑泥片岩を使っているので一名「板石塔婆」とも呼ばれているが、この名称は昭和三十六年に県教育委員会が新たに文化財指定のとき用いられその後この名が使われている。

分布はほぼ全国的であるが、適当な石材が容易に入手できる関係上、関東地方が圧倒的に

多く、そのうち旧武蔵国（埼玉県・東京都および神奈川県の一部）に特に埼玉県に約二万点と遺品が集中している。

造立された時代は戦乱が続く鎌倉時代の初期から室町・戦国時代に至る約四百年間であり、江戸時代に入ると急に遺品がなくなる。

この板石塔婆は市内御殿町の元荒川堤防上にあるもので、その建立は鎌倉時代中期の建長元年（西暦一二四九）で越谷市内に現存する最古・最大の板石塔婆である。

所在地　越谷市御殿町四四五ロ、四の路傍

高さ　一四五センチメートル

上幅　五ロセンチメートル

下幅　五四センチメートル

厚サ　五センチメートル

中央に大きく阿弥陀如来の種字キリークを雄大に薬研彫りで彫り込み、その下は建長元年己酉（つちのととり）が見える。

下半部は折損して残っていないが、もとは

No.

三メートルほどの雄大なものと推定され、願主・願文等が不明であるのが惜まれる。

連絡先 TEL 03 (969) 三四四一

古志賀谷氏の館跡は利根川(現在の元荒川)流路脇にあたる要衝で現在の御殿町のあたりと推定。[redacted]この板碑はここにあり、どうすると古志賀谷氏の板碑か？[redacted]板碑でも中世の初め頃は武士が好気とったものが一般的のようだ。

第18回 市民文化祭 原稿

「越谷市金石資料集」の中世 p2〜p18 } 参照して下さい

No. 「越谷市史 1・通史上」p377

越谷市を中心に分布する

山王二十一仏板碑について

星野昌治

山王二十一仏板碑とは、二一個の種子（梵字）を刻んだ板碑で、これは比叡山の日吉大社に奉祀する「上七社」「中七社」「下七社」の山王二十一社の本地仏種子を表しているとされ、現在、全国で四六基確認されている。

その分布をみると、北限は茨城県猿島郡三和町、南限は東京都文京区、西限は埼玉県大

（とうろう 越谷市入善）

宮市、東隅は千葉県武孫子市といった、一都三県が隣接する埼玉県東南部、つまり越谷市を中心にした地域に分布している。

※鎌倉・中世・関東の天台の盛行
山王神道と庚申信仰の普及

山王二十一仏板碑の最古の遺品は、川島市西新井宿宝蔵寺の永正十五年（一五一八）の造立のもので「奉庚申待供養」とあり七郎太郎ほかの交名（きょうみょう）が刻まれている。また、最新のものは、八潮市小作用長安寺の天正二十年（一五九二）のもので、山王二十一仏板碑の造立期間は七四年間となる。

No.

写真うらの番号

ところで、山王二十一仏板碑のほとんどは、庚申待供養、または申待供養の造立趣旨銘が刻まれている。これは庚申信仰と山王信仰が習合したことを表したものである。

さて、ここに紹介する二基の山王二十一仏板碑は、(殆ない)完全な形として現存する(中の)貴重な遺品である。

(いくは)越谷市酒寿薬師堂のもので、上部に日月天蓋を刻み、瓔珞の下の両側に申待/供養と彫る。紀年銘は種子の間にあり、天正三年乙

(まとまって)

No.

写真うらの番号

亥／八月吉日とある。さらに下には三具足があり、その両側には兵庫、三衛三郎外十数名の交名が刻まれている。

(2)は、越谷市千正東養寺のもので、上部二条線の下に日月、天蓋があり、その両側に甲待／供養とある。紀年銘は、後の間、中央一行で、天正三年乙亥十二月吉日とある。下部には、前机、三具足があり、その両側に神三郎、彦次郎、善三郎、集人助、政之亟、兵庫、彦左衛門、彦右衛門、新左衛門、孫八、

前机（まえづくえ）、

No.

新三郎、八郎三郎の十三名の戒名が刻まれている。

連絡先

TEL
0473
(51)
0417

伝承民俗行事

北川崎・坂巻家の御歩射について

石塚吉男

（関東地方東部に行われる春の農村の行事。もとは歩射（馬に乗らず徒歩で弓を射ること）の神事で、弓で的を射てその年の豊凶（ほうきょう）を占ったが、今は単なる村寄合になっている所が多い。備射、備社、競社）

北川崎根御の坂巻（勇）家は、寛永年間（一六二四～四三年）に、下総国葛飾郡大川戸村（松伏町大川戸）より、新武蔵新方庄川崎村（越谷市北川崎）に移り住み屋敷神として、天照皇大神を祀り今日に至る。

毎年正月七日（一月七日）に大番（大盤）と稱えて、親族、姻族の戸主を招き御歩射（

備社）の儀式を行うを家例としている。

屋敷祠に山海のもの、鏡餅、神酒を供えて祈祷礼拝の後、卯木（うつぎ）で作った弓矢、麻で絹った弦、的は青竹の先をまるくして和紙を貼り、的印に鶴と亀を描き、これを先ず当家の戸主が射的を行い参列者みなこれに倣う。的中の率を以って当年作の豊凶を占い、直会（なおらい）は奥座敷に於いていわゆる大盤振舞の宴会となる。

蓋（けだ）し、祖先の地大川戸は、中古、大河土御厨（騎西・足立の二郡を含む）として、伊勢

神宮の神領の本所であったことが「吾妻鏡」の記録の中にしばしば見られる。

往時の「大河土御厨」の神事の遺風が、民俗行事として永く坂巻家に伝え継がれたものか。

現在本所であった大川戸部落には皇太神宮（神明社）はなしているが、この神事は絶えて行われない。

戦後、坂巻家のこの儀式は簡略化され僅かに往古の形式が窺われるのみである。

註　歩射とは徒歩で行う弓射の儀、馬の場合は流鏑馬（やぶさめ）という。

弓射の儀が失われた今は、備社、毘社の宮をあてる、

大番とは上古は天皇、中古より将軍の座所を警衛する任務に就くをいう。

任期を果てると帰省して一族にその誉れを披露すること大番（を）大盤（を）振舞（を）いう。

連絡先TEL　(74)　二二一七

（高札A読み下し文）

中村忠夫
丸田国夫

何事によらず、よろしからざる事に百姓
大勢申合せ候を徒党と唱え徒党して
強いて願い事を企てるを強訴と云い
あるいは申し合わせ村方を立のき候を逃散と
申し前々より御法度に候条右の類の儀
これあらば、居村他むらに限らず早々
そのすじの役所へ申出べし。御ほうびとして

徒党の訴人　銀百枚
強訴の訴人　同断
逃散の訴人　同断

慶應通信・慶應セミナー

右のとおり下され、その品により帯刀苗字も
御免あるべき間たとえ一旦同類になるとも
発言いたし候ものの名まえ申出るにおいては
其科をゆるされ、御ほうび下さるべし。
方類訴人いたすものなく村々騒立候節
村内の者を差押え徒党に加わらせず
一人もさし出さざる村方これあらば村役人
にても百姓にても重々にとりしずめ候ものは
御ほうび銀下され帯刀苗字御免
さしつづきしすめ候ものどもこれあらば

東京都荒川区下尾久1丁目1番3号 株式会社慶応通信 電話(03)3819-8151

No.

税務通信・税務セミナー

それぞれ御ほうび下し置かるべきもの也

明和七年四月

奉行

20×10　東京都新宿区下落合1丁目1番3号　株式会社税務経理協会　電話代表03(3953)8051

（高札B No. 解説）

徳川幕府は全国に、近隣五戸一組で五人組を結成させ、相互監視のもとに防犯・納税の連帯責任を負わせたが、さらに褒賞金制度を設けて密告を奨励した。

この高札は明和七年（西暦一七七〇年）に全国に建てられたものであるが、この十八世紀後半は全国的に、強訴・一揆が激増した時代であった。

とりわけ明和元年（一七六四）には日光東照宮百五十回忌法要を行なうために幕府は、

20×10 東京都新宿区下落合1丁目1番3号 株式会社 教育出版 代表 [illegible]

膨大な助郷を企てたが、これを知った村々では大騒動となり農民総数七千人に及ぶ大騒動となった。これが熊谷宿でおきた、いわゆる伝馬騒動であるが、このような社会状勢のときにこの高札が建てられたのである。

なおこの褒賞金の銀百枚とは、銀四貫三百匁のことであり、金に換算すると七十一両余りとなる。当時と現在では経済規模が異るので時価に換算することは困難であるが、大工等職人の年間所得が二～三両ほどであっ

たことを考えると莫大な褒賞金といえよう。

この高札の寸法

高さ　中央一尺二寸五分（三八センチ）

両端一尺一寸（三三センチ）

横幅　三尺七寸（一一二センチ）

この高札は吉川町旧家戸張清家の所蔵である。

連絡先TEL（62）三四二九

蒲生の石宮　　日置宗一

三宝大荒神の石宮は基壇上の

三宝荒神　不浄を嫌う最も清浄とされるかまどの火の中にいる、火は清浄で不浄を掃う、かまどの神、台所の神、三宝(さんぽう)とは仏法僧をさす、三宝荒神は八臂(はっぴ)忿怒相持物は右手(金剛杵・蓮華・宝棒(五鈷杵)・金剛剣・矢)左手(金剛鈴・宝珠・羯磨(金剛鈴・弓・戟(ほこ)または槍))

高さ二尺九寸　巾一尺

山王大権現の石宮は基壇上の

高さ二尺八寸　巾一尺五寸

山王権現　江戸期の日吉(ひよし)神社(ひえ)または日枝神社の神(ひえ山のこと)

江戸時代には民家の台所に必ずといってよいほど祀られていた。祀り方は御札あるいは御宮あり、御米あるいはそなえる。

これらの石宮は共に　文政七甲申年三月吉日再造之とあり　これからみると　この年以前からあったものであることがわかる。

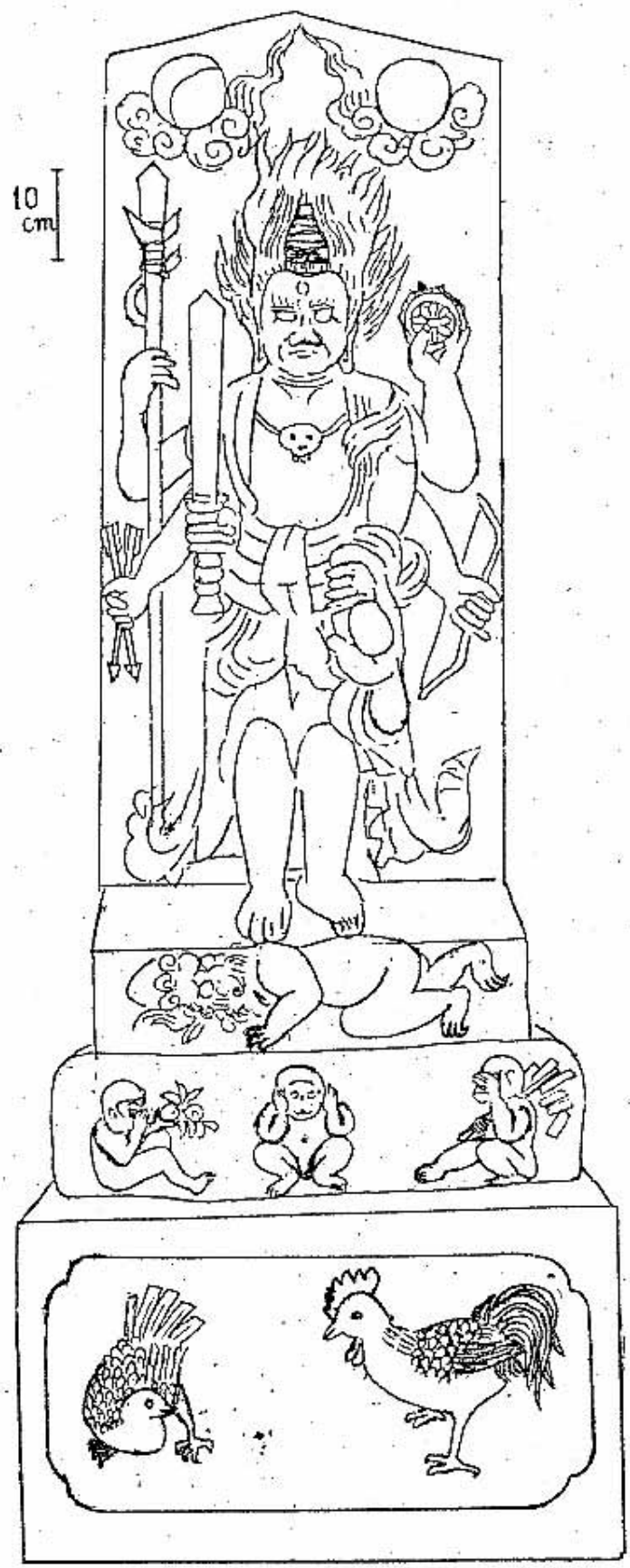
蒲生西町　寿町等に　五つ程の塚

があった。　この塚の石宮は二つが戦后に残されたものである。この外にも石柱等もあったようだが、今は不明となっているとのこと、また、山王大権現の石宮は蒲生西町の小字名山王の地名となったものでもあり、高さ五米程のこの塚は戦前には子供の遊び場所でもあった。戦后耕地整理のため平地にされ、しばらく塚のあった近くに置かれてあったが民家を建てる時に現地に移されたものである。

連絡先 TEL (88) 八一六二

コクヨ ケ-10 20×20

大聖寺の天保十年の庚申塔



高さ約158cm

大聖寺の庚申塔と言うと『百庚申』を思い浮べることでしょうが、ここでは其れとは別の庚申塔を紹介します。

庚申塔は江戸時代の庚申信仰の名残りとして市内でも到る所に見られる。庚申信仰とは、体の中に潜んでいる三尸虫が六十日に一度やってくる庚申の日の夜に、人の睡眠中に口から脱け出て天に昇り、その人が日頃犯した罪を天帝に暴く。するとその報告を元に判断して若死にさせたりする。それ故、庚申の日の夜は三尸虫が身体から抜け出る機会を与えないように寝てはならない。そこで庚申講の仲間達が一同に会し、徹夜して過ごす『庚申待』という行事が行われる。その記念として建立された石塔が庚申塔という訳である。かつては全国津々浦々で盛んに行われたが、明治になると急に衰頽する。

庚申塔の型式は様々あるが、大聖寺（大相模の不動）境内に

ある天保十年の庚申塔のように元禄の頃に完成した『日月・青面金剛・二鶏・三猿』の基本形が代表的である。大聖寺の天保十年（一八三九）の庚申塔は、上部には左右に瑞雲に載った太陽と月が配置されている。中央の六本の腕を持つ青面金剛は頭髪は炎のように逆立ち、その中にとぐろを巻き鎌首をもたげた蛇らしき物が見られ、目は三つ目となり忿怒の形相をなしている。胸には髑髏の首飾り（瓔珞）がある。又、各手には弓と矢や輪宝（矛先が八方に出ている）・矛・剣を持ち、女人の髪の毛を掴まえてぶら下げている。男尊女卑の現れである。但、女性の顔が約百五十年間の風雨に晒されて磨滅しているのが残念である。尚、三つ目と髑髏の瓔珞が描かれているのは珍しい。この二点は『陀羅尼集経』で説かれている通りとなっている。この経典に説く青面金剛の姿・形とは一部を砕けた表現で訳し

てみると次の通りとなる。

身体には四本の腕があって、上の左手には三股叉を下の左手には棒を持ち上の右手には輪宝を下の右手には羂索を持つ。身体の色は青色で、口を張って牙を出し、　真赤な目をして三つ目となっている。頭の上には髑髏を載せ、髪の毛は炎のように逆立っていて大蛇を巻き付かせている。両腕からは竜を一頭ずつぶら下げていて、それらの竜の頭は互いに向き合っている。腰には二匹の大きな赤蛇を纏い、脚や腕にも同じく纏っている。左手に持っている棒の上には大蛇が絡みついている。虎の皮を股にゆったりと纏っている。髑髏の瓔珞（首飾り・胸飾り）を首に掛けている。両脚の足下にはそれぞれ鬼を踏み潰している。

青面金剛の足下には天の邪鬼と呼ばれる鬼が踏み潰されている。

この庚申塔の鬼は手足の指がそれぞれ三本しかないのがおもしろい。その下には三猿がある。向かって右端は御幣を持つ見ざる。御幣は神の依代である。中央は性欲の強い動物とされている猿が女性の臀部を連想させる桃を持つ聞かざる。桃持ち猿は庶民の間では子授け・安産・下(しも)の病の祈願の対象となっていた。左端の言わざるの猿は臍がみられ、その下の陰部も表わされていて雌猿とわかる。今と違って当時の性に対するおおらかさが窺われる。殆どの庚申塔は見ざる・聞かざる・言わざるを唯刻んでいるだけであるが、このように描かれているのは珍しい。

二鶏(雄・雌)は普通は青面金剛の下部の両脇に描かれていて中には何の鳥か判名できない程に簡略に線刻されていたり、或は全く刻まれていない物まで見られる。それがこの庚申塔では三猿の下に独立してあり、しかも細部まできちんと描かれてい

て珍しい。

以上からこの庚申塔は江戸期の庶民信仰をよく反映しているばかりか、芸術的にもすぐれ、他には見られない庚申塔であると信じており、何らかの方法で後世の人々のためにこれ以上風化しないように是非保存してもらいたいものだと願っている。

一身四手。左辺上手把三股叉。下手把棒。右辺上手掌拈一輪。下手把羅索。其身青色。面大張口。狗牙上出。眼赤如血面有三眼。頂戴髑髏。頭髮鬢鬘如火焰色。頂纏大蛇。両肩各有倒懸一竜。龍頭相向。其像腰纏二大赤蛇。両脚腕上亦纏大赤蛇。所把棒上亦纏大蛇。虎皮纏胯。髑髏瓔珞。像両脚下各安一鬼。（『陀羅尼集経』より）

市内平方　加藤幸一

連絡先 TEL (74) 0344

迅速図で見る越谷

宮川 進

「迅速図」とは参謀本部陸軍部測量局が一師管地方迅速図の略称。地図がなくては一戦争しのできない陸軍が軍事上の要請からあえず関東地方を中心に三角測量を省略して平板による図解測量により作成した。東京を起点に四方に測量区域を広げたところ次第に誤差が累積し、その後の検定により三角測量を欠く測量方式は失敗であったことがはっきりした。このため明治18年から19年まで続けられたこの迅速図作成は全国をカバ

1すると「正式図」(三角測量による)作成に
とってかわられることとなった。
以上のように厳密な正確さに欠けるとはい
えこの迅速図は越冷におけるはじめての近
代的な地図であるといえよう。越ヶ冷駅流
山村(いずれも明治13年測量)岩槻村粕
壁駅(いずれも明治15年測量)の4枚をあわ
せたもので縮尺は2万分の1。国土地理院に
保存してある当時の地図のマイクロフィルム
からのコピーである。

冥川進

連絡先 TEL (75) 九一三九

MARUZEN I